

第1章 地域の素材を教材化し、学習に生かすこととは

第1節 授業の中で地域教材を生かす重要性

(1) なぜ地域教材か

一昨年、「中学校学習指導要領（平成29年告示）」（以下この報告書では「新学習指導要領」とする）が告示された。解説社会編の「改定の経緯」の中で、『何を理解しているか、何ができるか（知識・技能）』、『理解していること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）』、『どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力・人間性等）』の三つの柱のもとに、各教科の目標や内容が再整理を図られることとなった。

また、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進のために、『深い学びの鍵』として『「見方・考え方」を働かせること』が重要であると以下のように示された。

各教科の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方を自由に働かせることができるようにすることこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること」

それを受け、新たに示された『社会科の目標及び内容』において、

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次の通り育成することを目指す。

と「教科の目標」が示された。「見方・考え方」は、社会科の本質的な学びを促し、深い学びを実現するために不可欠であるとされ、それを働かせながら課題を追究したり解決したりする学習をしていくことにより鍛えられていくものであると書かれている。

従来から取り上げられてきたいわゆる「公民的資質」という社会科としてのねらいが、『グローバル化する国際社会に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力』としてより具体化され、とりわけ、『教科の目標』の（3）にある、『社会的事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度』を、学習を通して育てていくことが重要であると考えられる。これがすなわち、「社会に参画しようとする態度」そのものであるといえる。これは、地理分野において「地域の在り方」が項目として独立したことから分かる通り、地域社会、ひいては社会全体に関心を持ち、様々な形で参画していく態度が今後さらに求められている。

序章でも述べたように、以上のような教科の目標や、目指すべき子どもの姿を授業を通して実現していく上で、学習内容を「自分に関係する事柄」いわゆる「自分事」としてとらえ、学習意欲と社会に参画していく視野を持たせることのできる「地域の素材」を生かした学習が非常に重要な役割を果たすと考えるのである。また、特に小学校の社会科では、3・4年生の地域の生活や環境、先人の学習、5年生の日本

の地理についての学習を中心に、常に「自分事」という視点が学習の中心に位置し、先生方はどのように学習対象を具体化して子どもに近づけ、子どもの思いや思考に寄り添った教材提示や問いが生み出せるかということを日々試行錯誤している。過去に聞いた小学校の研究発表や、今年度たびたび参観した小学校の研究授業や発表大会でも、「自分事」のもとに教材を開発し、地域素材を中心に研究を構築し、授業を展開する例が、多くみられた。中学校においてもその点は重要であると考ええる。

(2) 優れた地域教材活用の意義

地域の素材が優れた教材づくりにつながる要素として、以下のように考えられる。

①生徒の積極的な関心を引き出し、問題意識につなげていくことができる

下記の②とも関係するが、生徒の直接経験している事象や知っているものを題材として取り上げることで学習内容や授業の取組そのものへの関心を高めることが可能である。具体的で直感的に触れられる実物教材や、時には野外観察で地域の風景や史跡などを直接見学することは学習への動機づけとともに、学習活動の中での軸になる知識となり、内容の定着につながる。

②生徒の直接経験や生活実感に沿って、思考や追究活動ができる

学習で取り上げる題材が、普段の生活や経験により具体的にイメージできるものであり、また資料やデータについても自分の感覚と比べて捉えることができるため、より具体的で切実な問題意識を持って思考や追究を深めることができる。また、地域の学習をする中で、「身近な地域のことなのに知らなかった」や、「身近な地域に今まで持っていたイメージと違った」という揺さぶりや発見を得る経験が、思考や追究に対する意欲や深まりに非常に重要であると考ええる。

③調査方法や学習方法の習得につながる

身近な地域に関する資料は、多くの場合教科書や資料集には載っていない。他地域の資料などと比較、解釈する必要があるし、内容によっては生徒自ら様々な方法で資料や情報を探したり、取材や観察をしたりする必要がある。資料や情報の入手・調査、直接の野外観察や聞き取りなどから、資料の選択や読み取り、作成などの技能を高め、作業的な学習や仲間との協働を通して学習課題を解決していくことで、資料や根拠をもとに思考、表現、構想していく力が高められる。

④地域への関心、愛着、誇り、つながり、参画の意識を育てることにつながる

具体的で切実な資料をもとに学ぶことで、地域に目を向け、特色や課題を見出す「見方」、地域の課題に対する解決方法やよりよい地域の在り方を考える「考え方」を身に付けていくことにつながる。また歴史学習においては、歴史的な事象と身近な事象がつながる事例を用いることで、遠い時代や遠い場所での出来事が現在の自分の地域の歴史的な事象および自分の生活・ルーツにつながりがあることを感じることができる。また、地域に暮らす(暮らしてきた)人々の思いや願い、地域の発展に関わってきた人々の足跡などに触れることで、教材がただの資料ではなく血の通ったものとなるだろう。こうしたことを通して、地域の現状や課題に対する関心、地域の歴史や先人の取組に対する感謝や愛着、地域の一員であるという自覚や地域の課題にできることから取り組むという、社会参画の意識を育てていくことができると考える。

地域教材の活用は、地域の社会的事象に対する理解を深めることだけでなく、地域の具体的な素材や課題をもとに学習することで切実感や積極的に考える意欲を引き出し、具体的なデータや数値、現象を扱うことで地域を見る視点やよりよい地域の在り方について考えることができ、「見方・考え方」を働かせ、鍛えることにつながると考える。

「見方・考え方」を働かせた「深い学び」には、「働かせがい」のある優れた教材が不可欠である。優れた教材は具体的な疑問点や発見・驚きを生み、学習内容を「自分事」に落とし込むことができる。それが意欲や積極的な探求や構想を生み、「深い学び」につながる。そこから地域や社会への理解・関心が深まり、自分自身が社会の様々な課題に意識的に関わりを持っていく「社会参画」の実現に近づいていくと考えている。もちろん様々な題材から教材を開発することが必要だが、本研究では地域に散らばる「優れた・隠れた素材」を中心に教材開発に取り組むことで、優れた教材を作るひとつのアプローチとしたい。

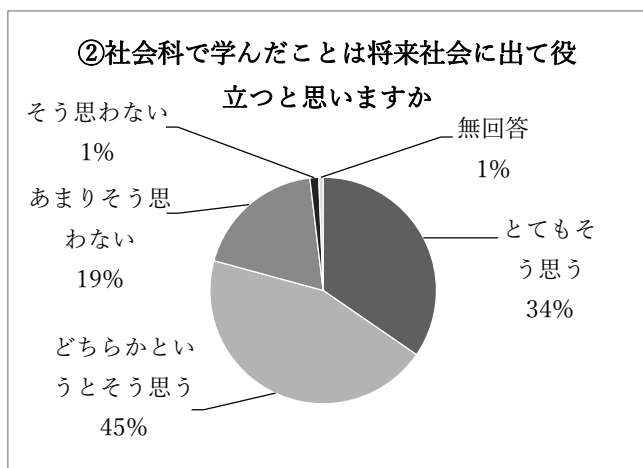
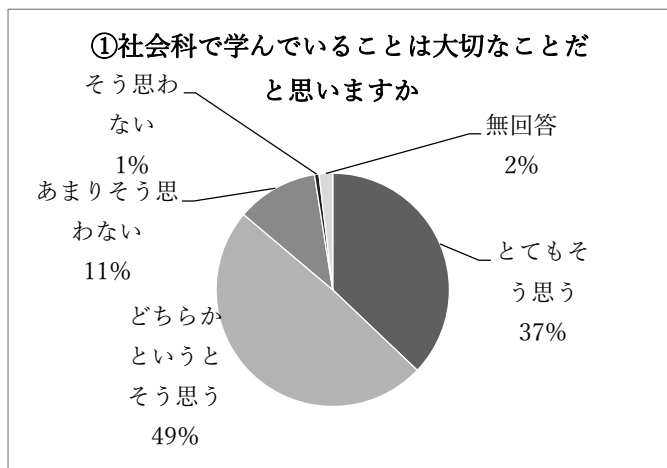
第2節 身近な地域についての生徒の実態 ～生徒への事前アンケートより～

本研究の実践を始めるにあたって、生徒の上里町に対する認識、社会科に対する意識、社会に参画しようとする態度について把握するために、生徒へのアンケート調査を実施した。アンケートは無記名で、上里中学校全校生徒と、参考として町内の他の中学校1校（上里北中学校）の全校生徒にも実施した。ここでは、事後アンケートとの比較の観点から、上里中学校2年生の事前アンケートの結果を中心に分析し、必要に応じてそれ以外の結果に触れることとする。

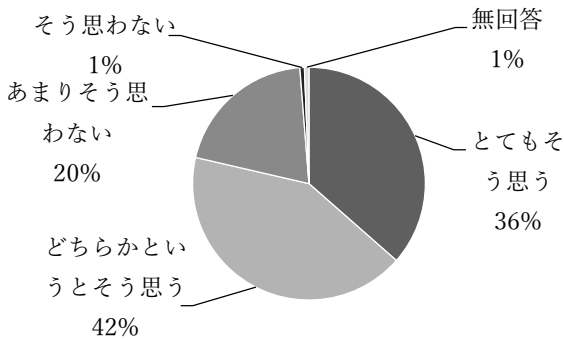
なお、アンケート調査を実施した2つの中学校の学区の状況について簡単に記しておく。

学校名	学区の様子
上里中学校 アンケート回収数 478名	およそ町の南半分。古くからの定住地である農村部が多い一方、高度成長期以降急速に増えた団地・住宅地や低層の集合住宅などの比較的新しい大規模な人口密集地を有する。畑での野菜栽培や水田と小麦の二毛作、南部の扇状地では梨の栽培なども盛んである。また、大企業の工場や児玉工業団地の一部を抱える。店舗も多く、スーパーが数軒、中規模のショッピングモールもある。
上里北中学校 アンケート回収数 292名	およそ町の北半分。旧中山道、国道17号が通過し、JR高崎線の駅を有する。近世以降町の発展の中心となってきた地区であり、駅周辺に古くからの人口密集地がある。それ以外は農村部が中心であり昔から住んでいる家が多い。近年は農地を転用し新しい住宅も増えつつある。農地は野菜や水田・小麦の二毛作が中心である。国道沿いに中規模のショッピングモール、ホームセンターがある。

(1) 社会科全般に関する内容（※上里中2年生の結果）



③社会科で学習した内容は、自分の身の回りの物事とつながっていると思いますか

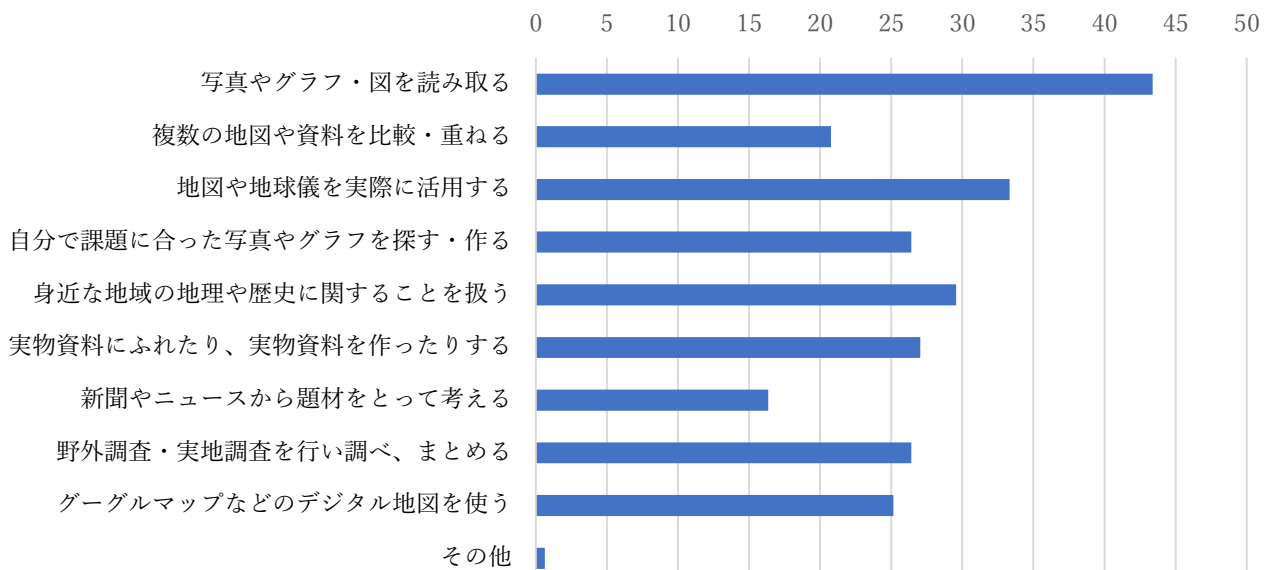


- ・①と②のグラフより、生徒たちは社会科を学習する意義については一定以上、理解はしているということになる。
- ・③のグラフより、社会科の学習内容と自分を取りまく社会との関連については認識しながら学習しているということは分かる。
- ・ただし、後述の身近な地域や社会参画に関わる内容と照らし合わせると、必ずしも具体性を伴ってはいないものであると考えられる。

- ・上里中学校2年生と町内中学生全体のデータを比較すると、①～③いずれの項目でも「そう思う」「どちらかというと思う」の合計はほぼ同じで、大きな差は見られなかった。上里中学校2年生については、上里町で学ぶ中学生全体の社会科に対する認識と大きく異なることはないといえる。

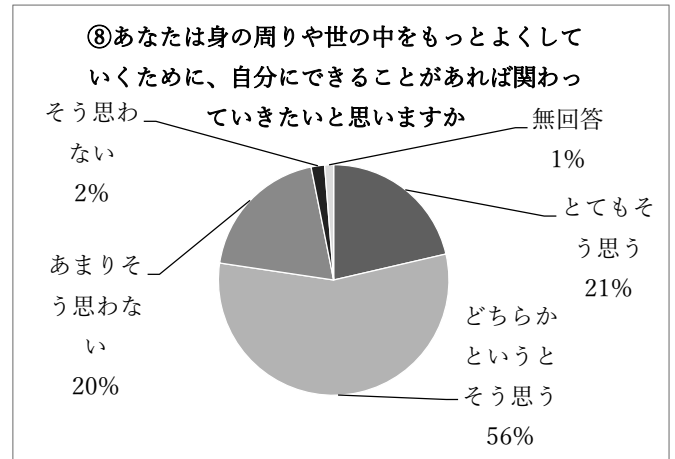
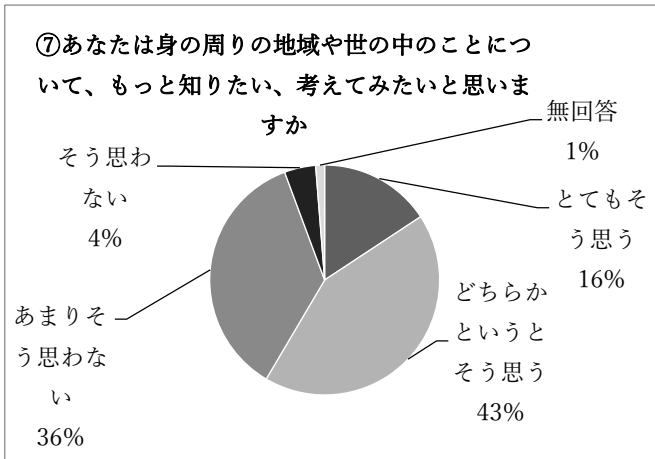
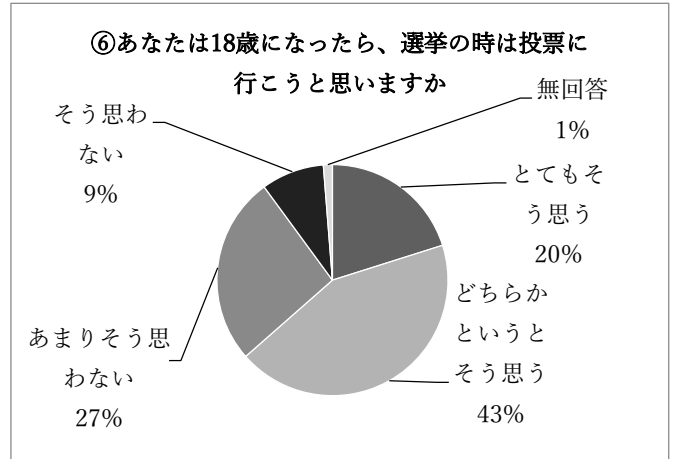
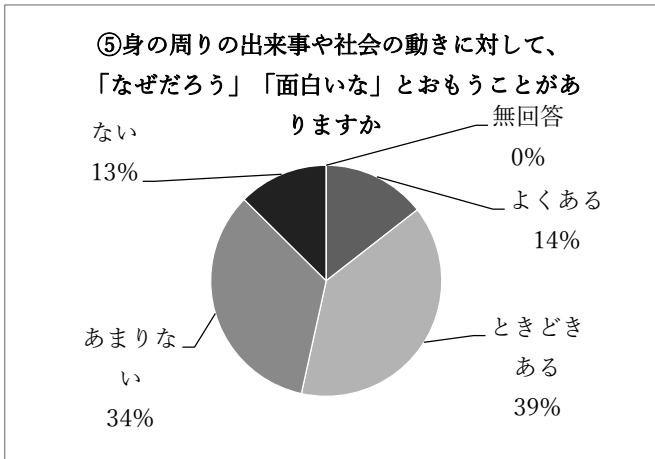
④学習に対して意欲がわくのはどのような題材・教材の時ですか（複数可）

単位：%



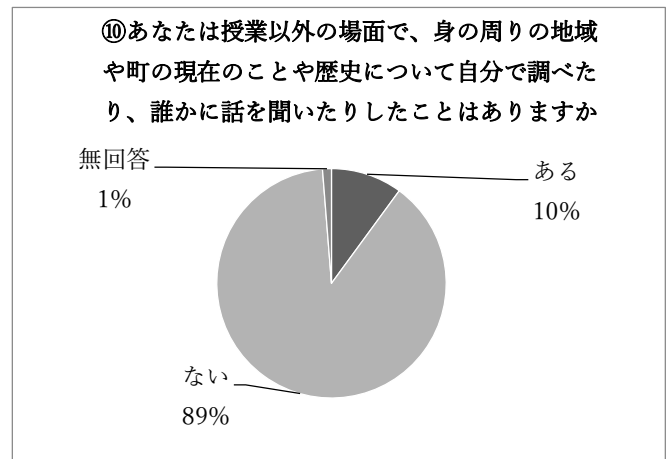
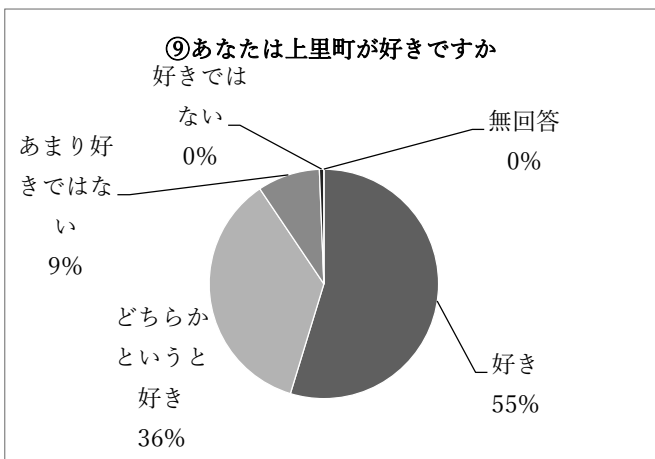
- ・④の質問に対する回答を見ると、生徒の意欲は具体的な教材や作業的な学習、野外調査やデジタル教材など手足を使った活動や、実際に感覚を伴う学習活動に対して高いということ、また実際のニュースや身近な地域に関する内容など、実際の出来事や具体的なイメージを伴う題材において高いということが分かる。ここでも、上里町の生徒全体と上里中2年生の結果については大きな差はなかった。
- ・④の質問の回答からは、作業的な活動や身近で具体的な教材を活用する項目がまんべんなく意欲の対象として挙がっており、これらはいずれも地域教材とそれを活用した課題解決に向けての学習に関連する内容である。生徒の意欲を高め、学びを深めていくためには、地域教材の活用と作業的な学習を通しての課題解決の実践は、生徒の実態からしても適したものであると考えられる。

(2) 身近な地域に関する意識について (※上里中2年生の結果)



⑤～⑧の結果に関しては、前述の①～③の結果がおおむね高かったことに比べるとあまり高いとは言えない。これは町内生徒全体の結果と比べてもほぼ同様である。生徒たちは社会の学習の重要性については認識しているのに対して、世の中に対する関心、よりよい社会づくり関わっていかうとする態度がまだ十分でないということがみられる。とりあえず社会科の学習が大切だとは思っていても、自分との関わりの実感や、問題の切実感までは到達していないと言える。この意識をいかにして具体的で内面的なものに深めていけるかが本研究の成果の重要な判断材料となろう。

(3) 上里町に関する内容 (※上里中2年生の結果)



アンケート全体を通して上里中2年生と町全体の中学生、また上里中学校と上里北中学校の全体で大きな傾向の違いはなく、特筆すべき差は見られなかったが、「上里町は好きですか」という項目に限っては、上里中学校全体では「好き」「どちらかというと好き」合わせて90%、同2年生91%に対して、上里北中学校では73%と、差が大きかった。上里町の特色を書かせた記述からその背景を推測すると、どちらの学校においても「あまり好きではない」「好きではない」と回答した生徒は下記の記述で「店が少ない」「畑ばかり」「遊ぶところがない」「何もない」といった内容で共通しており、上里中学区は比較的新しく市街地化が進み店舗も多く、上里北中学区では古くからの市街地と農村部が多いという、前述の「学区の特色」と生徒の回答の傾向が一致する部分が見て取れる。それぞれの生徒の住んでいる地域の周囲の環境がイメージとして直接的に大きく影響しているのではないかと考えられる。同様に上里中学校の生徒は「好き」「どちらかというと好き」という回答をした生徒も、内容は「お店が多い」「自然が多い」「人が優しい」などのイメージ中心であり、具体的な地域の特色に目が向いたものはわずかであった。「好き」という気持ちの根拠として、現段階では買い物できる場所や遊べるスポットの有無に関心が集中し、多様な視点や深い理解が不足した表面的なものであるとも言える。

問「あなたが上里町について、例えば外国の人など全く町について知らない誰かに紹介するとしたら、どんなことを説明するか、具体的に4つあげてください。」（自由記述）

※自由記述で書かせたものを分類し、多かった順。なお、近い内容については同じものとして分類した。

（例：「自然が多い」と「自然が豊か」や、「災害がない」と「災害が少ない」など）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
上里中 1年	店・大型 店	自然	こむぎっ ち	小麦	人が優し い	田畑	空気がい い	静か	田舎	サービス エリア
上里中 2年	店・大型 店	自然	小麦	田畑	こむぎっ ち	人が優し い	野菜	サービス エリア	神保原 駅	静か
上里中 3年	自然	小麦	店・大型 店	田畑	田舎	サービス エリア	カンター レ	災害がな い・少ない	人が優し い	空気がい い
上里中 全体	店・大型 店	自然	小麦	田畑	人が優 しい	こむぎ っち	田舎	サービス エリア	災害がな い・少ない	カンター レ
上里北 中全体	店・大型 店	小麦	自然	こむぎ っち	人が優 しい	カンタ ーレ	サービス エリア	田畑	田舎	災害がな い・少ない

※「田畑」と分類しているが、自由記述では圧倒的に「畑」が多く、「田」は少数であった。

「こむぎっち」は、小麦の穂をモチーフにした上里町のマスコットキャラクター。

「カンターレ」は、上里サービスエリア・スマートインターチェンジに隣接する、工場を含む大規模菓子店舗の名称。

内容を見るといずれの学校・学年においても「ショッピングモールをはじめとした大型店舗があること」「自然や緑が豊か」「小麦の栽培が盛ん」「畑が多い」などといった、あまり注意を払わなくても目につきやすい物事が多くなっている。確かにそれらは一般的に広く意識されやすいという点では町の重要な特色と言えるものかもしれないが、小学校からの社会科の学習を経て定着してきたものであるとは言

い難い。また、他地域と比較した場合の「地域的な特殊性」とまでは言えないと考える。

一方、上里中の中で見ると、学年が上がるに従って「人が優しい」「空気がいい」などの具体性に乏しい項目が低くなり、「災害がない・少ない」や「サービスエリア」「神保原駅」などの地理的な視点を含んだ項目が少ないながら順位を上げてきている。これは、1～2年生の社会科で、防災単元や日本の諸地域を学習し、学習の中で中核的事象として扱った交通や産業などから地域の特色を捉える「見方」が段階的に育っている成果と考えることもできる。また、上里中と上里北中の比較では上位の項目に多少の差はあっても傾向の違いは少ないが、「田畑」という項目の割合が上里中では高かったが上里北中で低く、「カンターレ」の割合が上里中では低く上里北中では高い点が異なった。「カンターレ」は上里北中学区寄りであり、比較的身近な点が回答の多さにつながったことは推測できるが、上里北中学校の回答で「田畑」の比率が低かったことは考察が難しい。

これらからわかることは、アンケート調査の時点では、上里町に対する生徒たちの認識として、日常生活の中で触れ、意識することのできる、また生活に直接影響する範囲の物事の中で「地域的特色」を捉えている段階であるということである。また、「空気がいい」など根拠に乏しいものや、「自然が多い」という漠然としたものが多く、これらは学習の成果や、他の市町村との比較、検討の中で生まれてきたものとは言えず、これらをいかに地域への関心や理解に基づいたものにしていけるかが重要である。

第3節 生徒の実態に対する教材化の視点

(1) 本研究における「地域」の設定について

まず重要であるのは、「身近な地域」とは何を指すのかということである。新学習指導要領の地理的分野 内容「C (1) 地域調査の手法」の「内容の取扱い」には

ア) 地域調査に当たっては、対象地域は学校周辺とし、主題は学校所在地の事情を踏まえて、防災、人口の偏在、産業の変容、交通の発達などの事象から適切に設定し、観察や調査を指導計画に位置付けて実施すること。

とある。また、同「C (4) 地域の在り方」には

取り上げる地域や課題については、学校所在地を対象として市町村規模の身近な地域やそこで見られる課題を取り上げることに、日本各地で広く見られる、地域への影響力が大きく、生徒と社会が関心を寄せる適切な課題を設定すること、また、その課題を捉えることができる適切な規模の地域を選ぶことを優先させ、所在や規模の異なる他地域を取り上げることも考えられる。

とある。これに加え、指導者である平澤先生から

- ・ 経験的に、生徒が実感を持って捉えることのできる範囲はおおむね半径1 km程度の円の中である
- ・ 市町村合併せず町域を保っている上里町は地域調査にとって非常に適切な規模の自治体である
- ・ 川を挟んだ国境地域で古代から発展していた地域であり教材化の可能性が大きい町である

という指導を受けた。生徒の生活の場はほぼ家と学校を2つの中心としたその周辺地域であり、アンケート結果から考えても生徒にとって「身近」な地域とはまさにその2つの中心から「おおむね半径1 km」の範囲であると考えられる。生徒の持つイメージや認識に寄り添って学習する「地域」を設定するのであれば、「学区」程度が好ましいであろう。だが、普段利用することの多いJR高崎線および神保原駅、主要な道路である国道17号とその原型である旧中山道、古くからの寺社、役場や図書館、資料館や文化ホールなど町の公共施設、今回重点の1つとなる神流川・烏川・利根川の流域など、「防災」「人口」「交通」「産業」などの視点から地域の特色や課題をとらえ、生徒の地域に対する「見方・考え方」を変容・拡張させ、高めていける素材は、学区内だけでなく町の全体に分布している。また、生活の場として経済面・政治や行政サービス等で自治体としての「上里町」との関わりがこの先も不可欠であり、多くの生徒がこの町で社会に参画しながら生活していくことを考えると、「上里町」の範囲を今回学習する「地域」に設定するのがふさわしいと考えられる。

(2) 地域教材の授業における位置づけ

上記のような生徒の実態や「地域」の設定を受けて、地域教材の開発と授業での活用により、生徒たちが町への関心を高めること、学習内容を生徒の身近なものに引き寄せて学習意欲を高めること、生徒たちが町の特色や課題を知り、現在その課題の解決に向け取り組まれていることを知ること、生徒たちの問題意識・切実感を高め、主体的に課題の解決にむけた学習に取り組ませること、生徒たちが自分たちの町によりよい在り方について考え、行動につなげようという意欲を持てるようにすること、などの実現に近づくことができると考える。身近な地域教材は、授業の中で以下のように位置づけることができる。

【中心的な教材】

- ・単元全体を貫く核となるような題材になるもの
- ・見方や考え方を揺さぶり、刺激して学習活動の中心となるもの

【補助的な教材】

- ・導入などの材料として、学習への関心を高めるもの
- ・一見生徒から遠いと思われる学習内容を生徒の身近に近づけるもの

この2つは固定的なものではなく、単元の課題や生徒に身に付けさせたい学習内容によって変化するものである。地域の素材を単元全体やその時間の学習内容の中心に据えることができれば理想的なことではあるが、必ずしも上手くいかない場合も多い。補助的な位置づけの教材であっても、遠い地域の事象や遠い時代の出来事を自分の関心やルーツに結び付けるような働きができれば、学びを深め、同時に地域への関心やつながりの意識を育てることにもつながると考える。

事前アンケートにもあるように、本校の生徒は具体的で実感の湧く実物教材や資料、野外観察の実施、ICTの活用などの学習活動において関心や学習意欲が高くなる。関連する記述として、新学習指導要領解説の「地域調査の手法」の項目にも『地理的な追究の面白さを実感できる作業的で具体的な体験を伴う学習を通して、地域調査の手法について理解し、地域調査に関わる地理的技能を身に付けることが大切である。』と書かれている。本研究では地域教材の開発を地理的分野のみに限らず行うが、深い学びを実現し、「見方・考え方」を働かせ、地域への関心に根差した「社会参画」の意識を高めていくため、可能な限り「具体的」で「体験を伴う」あるいは社会的事象を「追体験」できるような学習につながる資料を開

発・工夫していく。

この章では、参考文献として、特に

「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編」文部科学省 平成 30 年 東洋館出版社

「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編」文部科学省 平成 30 年 日本文教出版

「郷土を生かす社会科教育」昭和 61 年 清水章夫編著 さきたま出版会

「巡検学習・フィールドワーク学習の理論と実践 地理教育におけるワンポイント巡検のすすめ」

2012 年 松岡路秀・今井英文・山口幸男・横山満・中牧崇・西木敏夫・寺尾隆雄 編 古今書院

「生活の場の見方・考え方—地理教育演習—」1986 年 川合元彦 古今書院

「平成 6 年度 埼玉県長期研修教員報告書 地域素材を生かした社会科学習指導法の研究～授業実践『富国強兵と富岡製糸場』を通して～」1995 年 斉藤実

「平成 20 年度さいたま市長研修教員研修報告書 地域の史跡・史料（地域素材）を活用した中学校社会科授業の展開」平成 21 年 内田崇史

「平成 22 年度埼玉県長期研修教員研修報告書 地域素材を教材化し、児童の主体的な学びを生み出す社会科授業の研究—小学校第 4 学年『秩父鉄道と柿原萬蔵』の実践を通して—」平成 23 年 佐々島忠重

「平成 22 年度埼玉県教育委員会長期研修報告書 小・中・高における社会科の系統的な学習指導～越谷の地域教材開発とその実践を通して～（徳川家御鷹場と越谷のかかわりについてを教材開発）」平成 23 年 二瓶剛

「平成 25 年度埼玉県長期研修教員研修教員研究報告書 児童の主体的な学びを生み出す地域素材の開発と活用—小学校第 3 学年『わたしたちのまちと龍勢』の実践をとおして—」平成 26 年 古林学

を参考とした。